藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

予期せぬ出来事

「人間は進歩しているのだろうか」―医療施設のあったペルガマ遺跡を見ながら考えさせられた。

今から二千年以上も前、復元図に見られるようにホスピスのような施設があったというのだから驚くばかりである。

昔も今も、人間の本質に変わりはない。誰しも皆死ぬのだ。しかし、文明、科学が発達し、現代人は死を真剣に考えない傾向がないだろうか。

医術の神、アスクレピオスをまつる神殿を中心としたアスクレピオン（療養所）の遺跡を見ていると、神を中心に生活していたことがうかがえる。

一方、今の私たちは自分中心に生活している。それが人間の進歩と言えるのだろうか。便利で豊か、何でもできると思うのは人間のおごりであり、本質を忘れている気がする。

現代人の多くが物と金に振り回され、心の癒しを求めている現実を考えると、アスクレピオンは現代人にこそ必要なのかもしれない。

その医療施設のあった遺跡で皮肉にも健康を痛感させられる出来事が起きた。

今回のトルコ十五日間の旅の参加者は二十人。夫婦七組、友人同士二組、一人参加二人だったが、夫婦で参加した私と同世代の男性が発病した。

二百㍍にわたって残る神殿への参道

「なぜか、体が右へ右へと傾く」と言いながらカメラの三脚をツエに歩いていたが、しばらくすると吐き始めてバスに引き返した。

遺跡見物を終わり、二日目の宿泊地イズミールに向かったが、バスはホテルではなく病院に直行し、彼はそのまま入院となった。

翌朝「主人は脳出血を起こしたようで、旅行続行は無理。ここで入院加療いたします」と奥さんが報告され、二人を残してバスは出発した。

幸い病状は軽く、我々がトルコ周遊を終え、発着地イスタンブールに戻って合流し、一緒に帰国できたのは不幸中の幸いであった。

最近の海外ツアーは退職高齢者が圧倒的に多い。自分たちも気をつけねばと話し合っていたのだが、予期せぬ出来事は私にも起きた。

七十四話で紹介したカンガス神父と十月三十日からヨーロッパ巡礼に行く予定だった。すべての準備が完了した出発直前、突然、肺炎と心不全で入院する羽目になった。

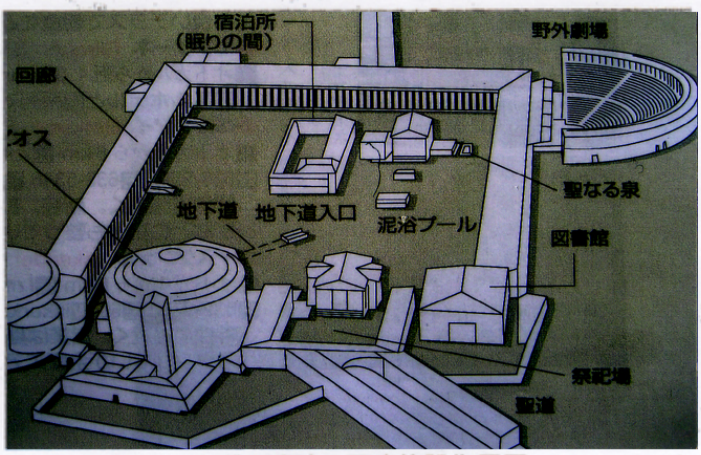
現代人は死や病気を真剣に考えない傾向にあると言っていた自分がこのざまだから、恥ずかしい限りである。

普通に横になって寝ることができず、本当に苦しい日々が続いたが、もし、これが海外での発病ならと考えると幸運だったとも言える。二週間で退院できたが、今考えると巡礼の旅に出る以上の体験をした気がする。

日常を離れ、聖なるものに近づき自分を見詰める巡礼も観光旅行になりがちだ。しかし、入院生活は強制的に自分を見詰め直させられる。

ベッドの中で神中心の医療施設の遺跡を思い出しながら、再び健康を与えられるなら、二千年前の人たちに負けないように生きたいと思ったのである。

（元山口放送取締役ラジオ局）



ペルガマ遺跡の医療施設復元図